

非とふ接頭語は、否定を表はし、非の次に在りて接すその語之義を否定し、当該語之義の叛逆の義をぞ表はす。それゆゑに、非の非たるは、非非とも録すべき哉。これと読みにせんと欲せば「非をぞ非する」とふべからずや。

又修辭にて倒置など用ゐんとせば「非す、非を」とならぬものは。又更に同語の重複を厭ひて「非す、を」ともいふ。これ漢字一文字で「非」と表はすとす。廼（すなは）ち非の一文字を以て同時に非への接頭語と為さ令め、以てその否定す處それ自らにしあらんとふ構図為さんとするなり。さてその義奈何や。あたかも自らの尾を咬む原蛇の如しなり。

それ喰らひ尽くせるものは。若し喰らひ尽くさなば、食はるるや、又は喰らふや。知らず。怎麼生（そもさん）何たるやこれ、知り得るものや。知に成り得ず。畢竟、非知也。

即ち非を否むならば、非は為せずも、非為せずば、非されず、非は為し得るものとせば。これ廼ち未遂不収の意なり。

いづこへも、いかやうにも着附せず、いかにてもあらず、「とてもかくても」とふべき。

只目前に擱かれたる碗が如なり。世に事実とふ杵あらずと

「違ふ」の杵あらずとも然り。

衆よ、世に何をか問はんや。

め質さんとせば、必ずや立つ瀬

ずば、更なり。原蛇の矛盾に陥らん。而して矛盾とふも復た論・理とふ方便に抛りたるモノにしあれば、思惟は亂れ、只立ち尽くすのみ哉。

論・理を証せるや。証すとは論・理を用ゐる。されど証す対象を用ゐて証すを排するも同じう論・理の定むる航路也。

又さりとて、是れ厭ふも復た規定に準ふ處なり。しかれども、ならば如何に處すべきや。着附せず。

只苔生す露地に坐し、蹲踞（つくばひ）の水に泛ぶ黄朽ちし葉を眺め、渺茫中挫の想ひすのみ。

秋の晰らなる日射し眩くも眼を細めさする沁み入りの明晰、懐かしき乾きたる涼風。又草潰して匂ふ若々し薫り、桜華も畢はり、唯蒼穹とこしへの鐘のやう久遠。水に映る曇天凍て、霜降るガラスのやうパウダー状のぼかしなすあはれ。炭の燠火赫々と奥に赭を滾ろはせ、底に強き緋、真中に昏き朱、その炎魂に濃き唐紅をなす。水道蛇口を捻る音、気怠き夏の午後静寂に響く。



し。透水明晰の如し。爾即則爾如眞眞如も「事実」違はず。仮に世に「同じ」

零に還り一切を基（もとゐ）の根より檢なし。論・理とふ方便も猜疑せざるを得



班班

我に於いて小説とふは、獣の皮を裂く打製石器にて、羽根筆りし肉を炙る炎、現実（うつせみ）を革むべき真言陀羅尼なる咒文、又觀照すべきアートなり。手に取り弄びて玩味賞翫すべき骨董なり。しくあらば読み難く、堪へ難きものとして厭はれ、公開するも読む者なし。

十一にして初めて創りぬ。以来数篇綴るも棄て擱く。三十三に大いに志し、三十六にて応募初（ぞ）め、今日に至るも一切一次も通らず、十五年（二〇一四年現在）にならんとす。十数篇を文學界、群像、ファンタジー・ノベル、左京賞、ポプラ社、メフィストへ送り、又数十篇を凝り舐り戯れ做りて自ら佚（たの）しむ。総じて七十余篇となりぬ。

以て我が想ひの儘作り、我が生命の義を尽くす。

次は人がために書かんとぞ思ふなる。既に我、櫻華の爛漫たる春を得にければ。山を降りんとす。

その区切りとて大いに論を纏め、碑銘の如くに、我が考へ得る限りの究竟究極眞中奥眞にて全一切凡てを網羅する真理を、そのかたちなく、際限なく、奔放にて解釈自由なる眞実義を録さんとす。これ齊しく普く裂きて讀（よ）きを齎す。

いざ逝かん。我が棲まふは人の為し得る懷疑の涯、能ふ限り無条件前提を崩し、思考せる果て、論考の竟の極み。この先何かあらんや。知らず。既與の知はこの極北にて力尽きぬ。

されども此處は永久凍土にあらず。至高の幸福あり。さるがゆゑに言はん、汝に幸ひあれ、と。それ、神なる天命の俣（たもと）と。我が畢竟の佳れなる一文字の小説も、いつしか機を得て衆生に功德せんことを希（こひねが）ふ。

心経の神咒、人口に膾炙して功德を生む。凡では心々とは知れども、心の中枢にありし心魄が一切を知り、生体のかたちを変ぜしめ、次々生き遣りて往く有様の摩訶不可思議、妙なる機（はたらき）なり。神咒の妙もこれなり。心機こそは甚深なれ。

いみじくも普賢は言ふ、「我が眼を以て衆生を見るに、皆已に究竟す」。また悉有仏性とも言ふ哉。悉く仏性ありと解すべきを悉有が仏性なりとふは凝り過ぎにてあらずや。自然（じねん）を缺く。

妙機を欣求し、自然を聴集せよ。道自ずからあり。求めよ、さらば得られんとは、これをいふ。求めよ。而して破天荒なれ。迺ち悉く既にこれを成就すと觀ぜよ。

『人間存在の實存的分析による存在論考』『空』にて左の如く録すは、この経緯をいふ也。

眞巖曰く「この文趣（ふみのこころ）、いづくにしかるとも究竟なり」

龍鳳曰く「しからば卷子皆同じう究竟ならずや」

眞巖曰く「ぞこそ佳（この）文究竟の所以にしあれ」